

●小袖の手拾遺

▼静観房好阿『諸州奇事談』（寛延三年へ一七五〇）刊
 「執着しゆくちやくの小袖こそで」

今は昔、東武の去る人の奥おくに勤ける局つほね、ある時三ツもの売うりとて、古小袖ふるこそでをあきなふ者の方より、地は紗綾さあやにて、もやふは空色そらいろに薺あさかほの花はなを縫ぬいたる古小袖ふるこそでの絵様ゑようおもしろく、気に入たれば、買求いて衣桁いかうに懸置かけるに。折おふし、傍輩わうばいの女中にようちゆう来りけるゆへ、「かゝるもやうの小袖こそで、古ふるけれど、雛形ひいながたにもなき絵様ゑようのおもしろさに、めで調しらべへたり。見給みたまへ」といふに、各おの々づ多おほしやくして一間いっけんへ行、衣桁いかうに近寄ちか寄よて見れば、かの小袖こそでの両りやうの袖口そでぐちより、白しろき手てあらはれ、野辺のの草葉くさばを風の吹ふきそふことく、ひらり／＼とうこきたるを、皆みな、二ふた目めとも見みず、肝きもを消けして走り出でしが、流石さすがにあからさまにもいわれず、やう／＼驚おどきたる胸むねをおししづめ、さりけなき体ていにもてなし、局つほねのまへに出て、「扱あく／＼、よき御小袖ごこそでにて」と、そこ／＼に挨拶あいさつして立去たりしが、おそろしき身に染しわたり、皆みな同じ枕まくらに打臥うちふして、四よ、五日ごにちか程ほど煩わづらひ けるとぞ。

局つほねは、かくともしらず、「此小袖ここのこそで、着きてみん」と、衣桁いかうより取とて、ひらりと打うち着ちたるに、我手わがてより先まに、氷こほりり（ママ）のごとくひや／＼かなる白しろき手て、袖口そでぐちより出でして、我手わがてにさわりける程ほどに、「あつ」とさけびて投なげ出し、早速さつそく売うたる町人ちやうじんをよひて、「あたひ返へん弁くわんにおよはず。此小袖ここのこそで、片時かたときもはやく持もち去さるへし」と、手てもふれずして、其男そのおとこに返かへしあたへぬ。

そも／＼、此小袖ここのこそでは、ある武士ぶしの家いへにて、密通みつつうしたる女の成敗せいばいせられたる。それが着きたる小袖こそでにて、其者そのものの執心しゆくしん、日ひころ愛あいせし小袖こそでに残のこりとまりたるなりけり。あはれ、心こころあらん人は、古着ふるぎの小袖こそでは求もと まじき物ものなり。かゝるけやけき妖怪ようかいこそ、希まれなれ。刑罰けいばつ・横死わうしの輩ともから、末期まつごまで着ちやく したるも、かず／＼ありなん。けがらはしき物ものにおゐて、又また此上このかみやあるへきとて、彼家かのいへには、末すえ／＼の者もの迄いたり、古着ふるぎ調しらべへて着ちやく 用もちするものなかりしと、慶安年中けいあんねんちゆうの物語ものがたりなり。

* 国立国会図書館蔵本による。翻字に際して、現行の字体として、句読点を補い、漢字を宛て、心中語には「」を付けた。また、改行を施した。以下も同じ。

▼『続向燈吐話』（写本・元文五年へ一七四〇）序

巻七の二「衣桁いかうにかけし小袖こそでより手てを出す事こと」

一、愛宕あたごの下した、御旗本ごはたもとの奥おくに勤つとめける局つほね、あるとき古着ふるぎ商あきなひける者ものかたより、地ぢは沙綾さあやにて、模様もやうそら色いろに、蘭らん花はなを所々しよ縫ぬひける古小袖ふるこそで、絵えやう面白おもしろく気きに入りいければ、買かひもとめ、衣桁いかうにかけ置おき、折おふし傍輩わうばいの女中にようちゆう来きりけるに、「かかるといふ模様の小袖こそで、古ふるけれど、雛ひいながたになき図えづゆへ、めづらしければ、調しらべへたり。見たまへ」とて、見みせけるに、おのおの会釈あしやくして奥おくに行ゆき、衣桁いかうにたち寄よれば、かの小袖こそでの両りやうの袖口そでぐちより、白しろ

き手二本あらわれ、風などの吹きそぶごとく、ひらひらと動き見へしかば、みなみな肝を消し、心をとめて見し者もなく、立ち帰り、さあらぬ体にて、「見事なる小袖にてさむらふ」と、褒めて帰りぬ。

二三日過ぎて、局外へ出けるに、「この小袖を着ん」と思ひ、手を通すに、我が手より先に、白き手、袖口より出て、氷にあたるやうに、手に触りければ、「あつ」といひて投げ出し、早そく右の古着屋へ人を遣し呼びよせ、「代物いかほどにても苦しからず。売り替へくれよ」とて取出し、渡し遣しけるぞ。

その後、「かかる事ありしが、その小袖はいづれより出ける」と尋ねしに、古着屋申しけるは、「御小袖御返しなされ候うへは、つつむべき様なし。さる屋敷、妾なりし人、密通の科にて成敗せられし。それが小袖なり」といふ。その者の執心、日頃愛せし物ゆへに、衣類に残りとどまりけん。「よくぞ早く返しける」とて、損失をば悔ず、とどめ置かざるを喜ひけるとぞ。

*木越治・責任編集『江戸怪談文芸名作選 第五巻 諸国奇談集』（国書刊行会、二〇一九年）による。『続向燈吐話』の引用は、以下も同じ。

江戸初期怪談リバイバル

●ろくろ首・夢で追われる女

▼『続向燈吐話』

巻九の十一「長門国の人、ろくろ首の事」

一、世に悪疾を病める人、あまたあり。長門国萩城下にて、ある夜、長州の家士、路辺に逍遙しけるに、ばたばた鳴りて、頂上を飛ぶものあり。仰のき見るに、美婦人の首、鉄漿黒くつけたるが、青き糸二三尺引て、飛ぶにぞありける。うち驚き、刀を抜いて、切り落さんとするに、この首あわただしく飛んで、流星のごとく、いちあしを出して追ひ行く所に、この首、城下の町屋の、とある家へ入りて、出ず。

あやししく思ひ、外面に立て、内の様をうかがふ所に、奥にて女の声にて、「何ものとも知らず、侍の刀を抜き持ち、我を追ひ来ると思ひ、夢さめたり。あら恐ろしや、いまだ身をふるわし、胸もとどろくぞや」と、おびへ苦しむ声聞こへぬ。

この侍、たち聞いて、「さてはこの家の妻女は、世に言ふ、ろくろ首なるべし。」夜、出てあそぶ」と諸書に記せるに偽りなく、我に見つけられ、追かけられしを、夢と覚へしならん」と、ひとり頷きて、たち帰り、したしき友へ、「かく」と語りけるよし。

▼小泉八雲『骨董』（一九〇二年刊）

「蛭」

だいいち、蛭だって、ひよっとしたら幽霊であるかもしれない。いや、知れないどころではない、昔から生きた人間の魂は、ときによると、蛭の姿になって出るといふ信仰さえあるくらいだ。次の話は、出雲で聞いた話である。

ある寒い冬の晩のことであった。松江の若い士族が、どこかの婚礼によばれた帰りみちに、自分の家の前の小川に蛭が一匹飛んでいるのを見て、びっくりした。雪の降るこの季節に、蛭が飛ぶとはどうしたことだろうと、怪訝に思いながら、しばらく立ち止まって見ていたが、そのうちに、その光りがふいに自分の方へすうっと飛んできた。士族は杖でそれを打った。すると、蛭はついと逸れて、そのまま、隣屋敷の庭へ逃げこんで行ってしまった。

翌朝、士族は、前の晩の不思議なできごとを、隣の人や友だちに話そうと思って、まず隣の家へ出かけて行った。ところが、まだその話の口を切らないうちに、その家の姉娘が、この若者がきているとは知らずに、ひよっこり客座敷へはいつてきて、びっくりして叫んだ。「まあ、びっくりいたしましたこと。あなたのおいでになつてゐることを、誰も申さないのですもの。それに、わたくし、只今このおへやへはいるときに、ひよつと、あなたのことを考えておりましたの。じつは、昨夜、妙な夢を見たのでございます。なんですか、自分がこうふわふわ飛んでいるような夢で、お宅の前の小川の上を、わたくし、飛んでおります。水の上を飛んでいるのが大へん気持がよくて、わたくし、しきりと飛んでおりますと、そこへあなたが、土手の上をぶらぶらおいでになりましたね。それが見えましたから、わたくし、急いであなたのところへ飛んでまいって、これこれで、わたくし飛行の術を覚えましたと申し上げようと思いますと、いきなり、あなたがわたくしのことをお打ちになりました。わたくし、もうそのときは、恐くて、恐くて。いま考えても、まだなんだか恐いような気がいたします。……」

客は、これを聞いてから、もし自分の暗合を話せば、自分の許嫁いなすけになつてゐるこの娘をきつと驚かすに違いないから、もうしばらく自分が見たことは話さずに置いた方がよからうと思つた。

*小泉八雲著・平井呈一訳『怪談・骨董他』（恒文社、一九七五年）による。

*当該話の類話は、『曾呂理物語』巻一の二「女の妄念迷ひ歩く事」・『諸国百物語』（延宝五年へ一六七七刊） 卷之二の三「越前の国府中ろくろくびの事」・『太平百物語』（享保十七年刊） 卷之四の三十六「百々茂左衛門ろくろ首に逢ひし事」といった近世初期怪談に収載されており、岡本綺堂『異妖編』『新牡丹灯記』（初出は一九二四年六月「写真報知」）に継承されている（第二十三回怪談文芸研究会にて報告）。

●さかさまの女・札はがし●

▼『向燈賭話』(写本・元文四年へ一七三九ノ序)

卷二の四「死霊と偽り盗をなす」

余が隣家に好事の者有り。下総の国辺鄙の生れにて、者云ひ患かに声訛り、言詰り、常に片辺の笑ひを催しける。ある日、「雨降り、淋しかりければ」とて、三人四人打寄り、四方山の物語りし居ける所へ、かの男来り、例の訛りの在所詞にて、「かかる事有りし」と語るを聞ば、初め可笑かりける。漸の、後には面白く感心しけるまま、反古の裏に書置けるを拾ひ見れば、

下総の奥へ近き辺土に、或夜、庄屋方の日待とて、村中の若き者、大勢集り、夜更るまで雑談しける。その中に、一人、「松嶋茂平次が妻女は死したるよし、実なるか」といふ。側より申しけるは、「人の死したるに虚説申すべきか。元來かの者の妻女は、癩病を煩ひ、目も見えず、耳も聾と聞へざりしかば、人の交り叶ひ難く、引籠居ける。茂平次、妾を召抱へて、密に呼入けるを、妬み憎みて、ある夜、小刀を懐に隠して、妾を前へ呼んで、刺殺さんとしけるを、茂平次見付け、やがて押伏、刃物を奪ひ取り、一間の柱に搦め付け、それより食事を与へず、湯水をさへ断ければ、飢渴にせまり、日を経て死ける由。妻女に親類縁者もなき他国者なれば、跡弔らはん人も有まじ。もし霊あらば、かかる者こそ恨みをも成なん」と密々耳語ける所に、

近国よりこの村へ腕売に來り、庄屋某が方に旅宿し居ける男、初めより日待連衆の物語、耳を澄して聞けるが、末座よりにぢり出て、「さてさて哀なる義、累、与右衛門が昔語に劣らぬ噂なるべし。この恨はかならず幽魂あらはれ出で、怨を成すものなり。我も身に差構なければ、当所に暫く逗留し、怪異を見物致したきものなれども、旅商ひ致す身は、居住定め難し。重て参て、跡の噂を承るより外はなし。若き時分はかやうの事聞き侍れば、夜更て墓所へ参り、印建置ことも有り。または卒塔婆なんど引拔歸しこと、数度有りしかど、今や老の坂へ一兩年踏入りぬれば、他人のかかる義を申すさへ、異見致したき氣になりしは、まことに人の心程變化する物はあらじ」と、態と余所に譬へて、若人へ無益の意地を持せ語りければ、

物に堪へぬ血氣の若者ども、「これはよき慰みならん。その妻女を葬たる所へ行き、闇夜なれば人も知るまじ。墓所に建たる七本卒塔婆の三日目を抜來たれ」といふ。「もつとも面白からん」「誰行く」「彼行かん」と諍ひ果しなれば、「鬮取りにせよ」とて、人数程紙撚撚て差出しけるに、我よ人よと押合取ける中に、いらざる事申出したる旅の腕売に、長き鬮はあたりける。

「我等、所の案内知らねば、途中まで誰ぞ一人見送りに預りたし」といへば、その村にて異名さへ「向ふ見ずの九蔵」といふ不敵者、「我こそ案内致すべけれ」と望み出で、兩人、直にかの墓所へ行きぬ。

跡に残りし者ども評しけるは、「勢ひ猛に見ゆれば、卒塔婆は抜もせざらめ。見よかし。三日と有る書付は、怖しさに取違へてこそ帰り來らん」と嘲哂笑ひ居ける所へ、九蔵、腕売、息を切つて走り帰り、「言葉にも似ず、旅人は心後れ、墓所までは得行か

ず。腰拔て途中に居たるを引立てて参りたり。これ見よや、三日目の卒塔婆、約束の証拠は九蔵こそ取得たり」と、座中へ投出し、鬼の腕取たるごとく、罵詈喚きければ、皆々手を打ちて称歎しける。兎角して夜明ければ、己が家々に帰りぬ。

その翌日、昨夜寄合し者ども、その村の寺院へ集り、九蔵が骨折を直すとして、酒盛しけるに、椀売は風邪に犯され「起こと能はず」とて来らず。「臆病風にこそ」と笑ひて、夜更でぞ各々退散しける。九蔵は数盃に酔乱れて、踏足も地に着かず。かの墓所は己が家路へ往來の道筋なれば、何心なくその所を通りける所、白衣に髪引ちらし、面体、しかと見へわかぬ者、墓所の木影に頭れ出、「もしもし」と呼ぶ声、いと凄まじく、世の常の人ならんには、忽そこに倒れんに、不敵強勢の男、酒には酔たり、振仰向て、「何者ぞ」と問う。「我等は茂平次が妻女なる。夫や妾がつらかりし恨、骨髓に入りて晴れがたし。これによつて、家内へ伺ひ入り、怨をなさんと思へど、子細有りて今まで本意を達せず。大丈夫の氣象を見請け、頼みたきことあり。請合ひたまはらんや」といふ。九蔵聞きて、「我、茂平次に恨みなし。しかし、「頼む」と有るを、「否」といわんも男道の義を欠くなれば、世の譏、人前恥辱とさへ成らざらんには、望を達し得ません」といふに、かの靈近く来り、小声になり、「茂平次が家は、門戸堅く鎖て、出入自由ならず。その御方は勝手能知り給へば、我を手引し、家内へ入れ給はらんにおゐては、怨報心の儘にせん」といふ。「それは最安きことなり。さあらば、我跡に付来たれ」とて、先に立ちて歩行めば、かの靈もまた随ひ来りぬ。

程なく茂平次が門に至り着き、兼て覚へし台所戸際の壁を穿ち、手を差入れ、鏢外して、幽魂を押し入れれば、「忝し」と耳語て入りぬ。

伝へ聞く、亡霊、戸守に怖れ、人を頼みて取捨させしやうも有り。この靈、守護札数十枚張付け見ゆれど、怖るる気色も見へず。また、世を去りて怨念頭れ出なば、神変の術も有るべきに、門戸を明ることさへ勝手知らずといふ。「かたかた不審き幽霊かな」と思へど、後難は知らず、目前の我身の難儀にもあらねば、「それまでよ」とて、九蔵はこれより宿所へ帰りて伏ぬ。

夜明けて、人の立騒ぐを聞に、夕部、茂平次方へ盗人忍び入り、日頃貯へ置き金銀、衣類さへ盗み取られしとて、召仕の人は勿論、村中かり集め、方々方々尋るにぞ有りけり。九蔵、これに心付て、「さては幽霊と偽り、我をたぶらかし、門戸明けさせしは、この盗賊なるべし。「かく」と告なば、「我もその同類ならん」と疑ひ請んも迷惑なり。ただ何となく、その者を尋出し、その時節、申訳せんより外あらじ」と分別し、さて勘ふるに、「かの靈が声色、何とやらん、旅人の椀売が声に似る所あり」と思ひしかば、急ぎ庄屋方へ行き、かの者を尋けるに、「今未明に発足して、何方へか行ぬ」といふに、力なく、それと知りても詮方尽てぞ、しらぬ風情して過ける。

程経て、かの旅人、下野国日光山の方山里にて辻切して召捕へられ、拷問の上、下総の国にてかかる盗みせし旨、白状に及びしとて、その噂伝聞ければ、九蔵も今は隠し遂られず、茂平次へ旨趣を語りて、「我等いらざる勇気を出して、人に損失かけたりし」と懺悔しけるとぞ。

▼平仮名本『因果物語』（寛文年間刊）

巻二の一（片仮名本・上の七の一）「妬て殺せし女主の女房をとり殺す事」

濃州より或牢人、尾州名古屋に行て帰けるに、日暮になりて、くり舟にのりて川を渡る時、女の声にてしきりに呼かくる。何とやらん、心にいぶせく思ひけれども、声の聞ゆる方に立寄てみれば、足を上になしてさかさまに立たる人也。いよ／＼おそろしかりけれども、心を静めこと葉をかけて、汝は何者ぞといへば、我は此所の庄屋の内につかはれし者也。不慮の妬によりて、非分の死をいたしけり。敵をとりて参らんとおもふ。ねがはくは此舟をわたして給はれかしといふ。是はあやしきくせ物かな、もし否といはゞいか成ことをかなすべきとおもひ、いとやすき事也とて舟にのせられたれば、さかさまながらのりけり。岸につきて侍へりしかば、舟よりおりけり。漕婦らんとするに、かの者いはく、家の口々に牛王の札おほくありて、内に入がたし。逆の事にこれをまくりて給はれといふ。力及ばずひそかにかの家にゆき、牛王・屋札をはぎ取たり。かの幽霊内に入たりとおほえて、只今まで女共七八人居ならびて、綿車をよりてありしが、さはがしく聞ゆ。あくる夜、かの亡霊は牢人の家に来りけるが、今は常のごとく真様に成て窓の前なる庭に立て云やう、昨夜おもふ敵をとりて、今は真さまに成て、身のくるしみをのがれたり。ひとへに大恩浅からず。今よりのちは御身の守りとなり、自然の事のあらん時、必らず御用に立て、此御恩ほうじ奉るへしとて、かきけすことくうせにけり。さては庄やの女房、俄にむなく成たるは、この女の敵にて有けりと。

此由来を委しく尋ねきけば、かの亡霊は庄やの手かけ也。女房ふかくねたみけるが、夫有馬へ湯治しける留守に、下男を頼み、川向に古き井のものと有けるに、彼女をすかし出し、井のはたに立より、古き井なれども水よくすみて、人影のあり／＼とみゆるといへば、彼女立よりてのぞきける所を、さかさまにつきはめてころし、世には身をなげたりと披露しけり。

其夜より亡霊となりてくり舟の渡りに来り、さかさまにたちて人にはみえけり。これを見たる人は化物有とておそれ、沙汰せしほどに、日くれよりは行かふものもまれ也。かの庄や有馬に居けるを、飛脚を立てつけられ共、身を投て死けるはのれが愚痴の科よとて、さのみおとろきもせず、三七日湯に入て帰らしと也。

寛永廿年八月の事也。是は江戸にてさる大名の家中に、しよ用事ゆへ濃州の彼牢人來りて、直に語り侍へり。まことにおそろしき事也。もろこしにても非道にころされたる女、幽霊になりてうらみをほうぜし事、其ためしかす／＼おほ



しといへども、まさしく目の前にかゝる事を見るにつけては、よこしまなる事にはかならずむくひありといふ事、いよ／＼いつはりにはあらず。おそれてもおそるへしと申されし。

*『浅井了意全集 仮名草子編』四卷（岩田書院、二〇一三年）による。

*掲載画像は、高田衛・有働裕・佐伯孝弘編『西鶴と浮世草子 研究 第二号』（笠間書院、二〇〇七年）特別附録CDによった。断らない限り、画像は以下も同じ。

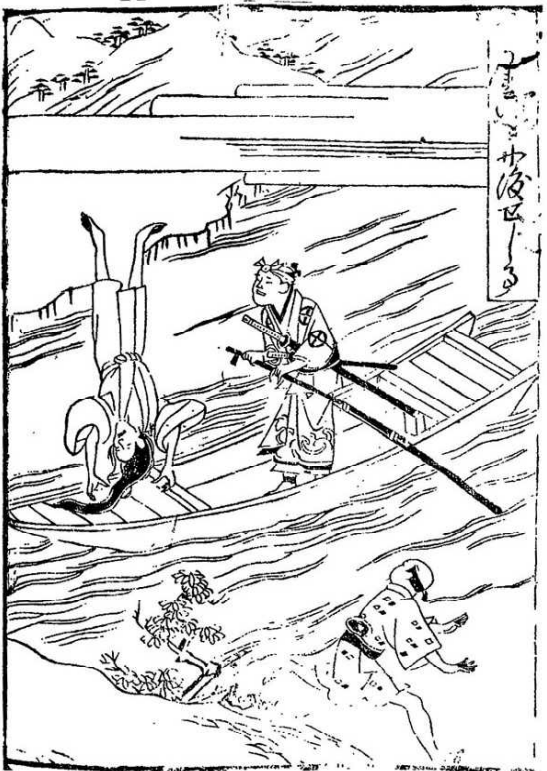
▼『諸国百物語』（延宝五年へ一六七七）刊

巻四の一「端井弥三郎、幽霊を舟渡しせし事」

信長公（のぶながこう）（織田信長）の御家来に、端井弥三郎（はししいやさぶろう）（実在人物かどうか。）とて文武二道の侍（さむらい）有り。のちは備後殿（びんごどの）（未詳。）に奉公して、清洲（きよすず）（清洲城があり、織田氏の根拠地だったが、後に徳川氏の領となる。現愛知県西春日井郡清洲町。）に居られけるが、大山殿（おやまどの）（元和三年以前は、平岩主水頭親吉。以後は、成瀬隼人正虎が、犬山城主。）御息と、男色（なんしよく）（衆道。戦国武士の間では特別な事ではなかった。）の交はり浅からずして、三里が間を夜な夜な通ひ給ひけるが、

ある夜、夜詰（よづめ）（宿直番。夜勤。）すぎ候ひて、犬山へ行かれけるが、折しも闇にて、雨しきりに降り、物すごき夜なりしが、道に川渡しあり。渡し守り呼びけれども、川下（かわしも）に眠りて音もせず。弥三郎は、川端に立ち休らひ（立ったまま休むこと）、川の上下を眺め居たる所に、川上より、火見えたり。ぜんぜん（次第に）近づくと、よくよく見れば、女、丈夫なる髪をさばき（身長ほどある髪を束（つか）ねもせず、散らして。）口より火焰（かえん）を噴き出だし、逆さまになり、頭にて歩きける。弥三郎、これを見て、刀を抜きくつろげ（刀を鞘から二センチほど抜き、いつでも抜き打ちできるようにすること）、「何物なるぞ」と問ひければ、かの女、苦しげなる声を出だし、「我れは此の川のむかひ、屋村（やむら）（不詳。）の庄屋の女房にて候ひしが、夫、妾と云合はせ、我を締め殺し、此の川上に、執心（かたき）も参らぬやうにとて（怨念が祟りとして、発現できないようにと）、逆様（さかさま）に埋め置き申し候ふ。敵（かたき）を取りたく候へども、かやうに逆さまにては、川をも渡りがたく候へば、あはれ（あ何とくして）、武辺の人（大胆、勇猛な武士。）に行きあひ、渡して貰ひたく候ひて、此の所、往来の人々を、つねづね心がけ候へども、御辺（あなた様）（あなた様。）ほど、心剛なる（剛強。）人はなし。ねがはくは御慈悲に此の川を渡して給べ」と申しける。

弥三郎、心得たりとて渡し守りを呼び、「くだんの女を舟に乗せ、向うの岸に渡せ」と云ふ。渡し守り、此の女を見て、櫓（ろ）（櫓と櫓。舟を漕ぎ進めるオール。）を捨てて逃げ去りぬ。弥三郎、櫓おつとり（勢いよく、その道具を



取る様。)、かの女を舟に抱き寄せ、向うの岸に渡しければ、女は屋村をさして飛び行きける。

弥三郎、跡を慕ひて行き、庄屋が門に立聞きしければ、女の声にて「あつ」と叫ぶ音しけるが、ほどなく妾の首を引つ提げ出で、弥三郎にむかひ、「御蔭にて、やすやすと憎しと思ふ敵を取り申したり。かたじけなし」とて、痕方なく消え失せけり。

弥三郎は、それより犬山へ行き、夜明けて帰るさに、屋村にて、「ゆうべ、何事も此の在所になかりけるか」と、問ひければ、在所の者、「此の村の庄屋殿、此のごろ女房を迎へ(妾を後妻に直したのである。)給ふが、今宵、如何なる故にか、女房衆の首を何者か引き抜き返り候ふ」と語る。弥三郎いよいよ不思議に思ひ、備後殿へ、此の旨、かくと物語り申しあげれば、彼の川上を掘らせ、御らんずれば、案の如く逆様に埋めたる、女の死骸を掘り出だす。前代未聞の事(かつて聞いたことのない悪事。)也とて、かの庄屋を成敗(処刑。)なされけると也。

*高田衛編・校注『江戸怪談集(下)』(岩波書店、一九八九年)による。注は()内に記した。

▼北条団水『一夜船』(改題本『怪談諸国物語』)(正徳二年(一七一二)刊)

卷二の二「詞をかはず磔 女「無実は晴し冥途の闇／嶋原陣の手から咄し」

武州川越の住人、入間和田右衛門、仕官を辞してしばらく閑居せし比、ちよぶへ立越、夜に入て荒川の岸陰にたゝすみ、道におくれたる一人の僕を待合する所に、そのほとりにかゝりし逆磔の女、木の空より這さがり、手にて歩み、和田右衛門が前にきたりて、「御自分ならで世にたのむ方なし。此川を負こし、向ふの家の門にはりたる祈禱札を剥りて給れ」といふ。和田右衛門、すこしもおどろく気色もなく、「今むかふより川を越きたりし者なり。あとへ戻らん事、いとむつかし。今に向ふへ行者きたるべし。それをたのめ」といへば、女泪を流し、「余の人は、我姿をおそれちかづかねは、ことばをかはずべきたよりなし。たま／＼人界にうまれきたりて、又修羅道にながくしづむ苦患をたすけ給はれ」と、かき詢きけるに、「あはれ」とおほへて、「いざ」とてうしろをむければ、女うれしげに身を取なして肩にかゝりぬ。嗅くけがらはしきみたれ髪、和田右衛門が顔におほひ、こゝろならず川を負こして、かの家の前におろし、門の札を剥れば、女うち笑、家に入と見へしが、忽家内騒動して、やがて女の生首をくはる出て、始の川を越と見へぬ。和田右衛門、興さめながら、又川わたりける所へ、最前の磔あらはれ出、「御かげにて本望をとげ、かたしけなき事、詞に述べがたし。我、もとかの家に召つかはれし者なりしが、主と心をかよはすとうたがひ、女家主のたくみにて、無実の罪に身を随し、かゝる苦しみの死を致し、二世の罪を植る瞋恚の恨、こよひ本望をとげたる事、御恩浅からず。此一念のちからをもつて、御返礼申べし。望み給へ」といふ。「我、亡魂の礼を請べき所存なし。しかれ共、汝にたのまれて人の命を取たれば、罪障いかにかりにかあらん。これを初発心として世を捨て、かの者の菩提を弔らはん、とおもふの外なし。我に厚恩の古主あり。もし、汝がこゝろざしのむなしからずは、その御方の武運を守れ」と、申しければ、かしこまり諾して消うせぬ。和田右衛門は、

それより剃髮染衣の身となり、一とせ津の国長柄の片里に、しばし行脚の笠を脱し、祖寬法師なりしとかや。

かの肥前嶋原一揆の時、逆磔の影ある備への簀にうつりたる武士、誉を取ける事かくれなし。その子孫相つゞきて、今に端午の幟に此旗をかざりけると聞伝へぬ。しかれば、かの女のごとくならば、世に幽霊といふもの、きはまつてある物にや。答て曰く、「惣じて、万物のうへに常と変とのふたつあり。委しく愚作の『独鈷鎌論』といふ書に述べたれば、爰に略す。今、此不審につきていはゞ、平生底の人、気おとろへ形つかれ、生老病死と次第して死する人は、火のおのづからきえて、その灰にもあたゝかなる気のなきがごとし。是、常といふものなり。変死は、人を恨死にし、あるひは鬪諍・劍戟・中天・禍害によつて死する者は、その気も形もいまだ自然とおとろへずして、率爾に死するより、いまだ

もゆる火に水をかけて消たる時、あたゝかなる氣しほし残るがごとし。猶、その火、その気の強弱によつて、その残る品にも浅深厚薄有がごとし。天地の間より生ずる物、みな氣よりおこれり。此氣のとゞこほる時、形を生ず。たとへば、煙の形あれども、手にもとられず。少も色相の物にさゝはる事なしといへども、つもりて煤になりたる時は、手にとらるゝがごとし。是、氣は質のはじめなり。その氣、とゞこほりて形をなし、声を生じ、黒白黄赤の色相をあらはす物を名づけ、幽霊といふ。是、変といふ名義なり。善をなす者は、善の氣凝て善処に形をあらはし、悪をなす者は、悪の氣凝て悪趣に墮るといふ仏説も、又宜ならずや。



*改題本『怪談諸国物語』（国立国会図書館蔵本）による。

● 蛇に呑まれた男 ●

▼ 瑞竜軒恕翁『虚実雑談集』（寛延二年へ一七四九）刊

卷一の六「蛇に呑まれし人の事」

これもむかし、信州瀬馬塩尻辺の山の奥へ、ある人行ければ、人おほく出ける中に、頭禿げて、髪も眉毛も、少しもなく、顔も、前後も知れぬやうにて、銅の鍋を見るやうなる者あり。いぶかしくて問ひければ、村の長が申しけるは、「彼はもと侍にて、兄弟有りけるが、ある時、兄弟山へゆき、「峰より谷へ下る」とて、二人左右へわかれ、「いづれの所にて行きあふべし」と約束したるに、兄、その所へ行きけれど、弟見えず。「いかが」とて、また来し道をかへりみければ、大きな松の木などの臥したるやうなる、蛇ありけり。「さては此ものの、わが弟は呑みけり」と思ひて、刀をぬき、まん中を切りければ、弟、蛇の腹より出けり。谷水にて洗ひ、葉をあたへ、やうやうにして、家へつれてかへり、いき出でて、今にかくてあけり」と語りしとなり。

▼ 『宿直草』（延宝五年へ一六七七）刊

卷三の七「蛇の分食といふ人の事」

ある人の語るは、元和八年（二六二三年）の秋、紀陽和歌山へ行きて、著き人の許に話し居るに、歳五八ばかり（四十歳くらい）の男、己が業に、簀（籠、箆の一種）に魚いれて、荷ひ売りする者有り。また、頭滑平（つるつるして）として、髪一筋も生ひず、ただ葉缶の如し。異名を呼んで、蛇の分食の来たりといふ。さて商ひして、彼の者は去る。

其の跡にて、「子細こそあらめ」と云へば、亭主ほくそ笑みて語る。「彼はもと古郷は山家の者也。年六つになる長月の比、伯父寵愛して、山雀取りやらんぞとて、罟を持ちて山に率て行くに、果たして数多く取る。伯父かれに云ふやう、「此の子鳥籠を持てあの池に行き、餌器に水入れよ」とてやる。やや待てども帰らず、声して呼ぶに更に答へず。不審に思ひ、汀に行きてこれを探ぬる。籠と草履は有りながら、主は更に見えず、彼方此方見るに、向ふの湫の沢水溶々として草茸々たるに（繁茂しているさま）松の木一本添ふてあり。彼の面を見れば、太さ四、五尺ばかりの蟒蛇（大蛇、うわばみとも）、口なめずりして居たり。

さてはきやつこそ敵なれと、急ぎ我が屋に帰り、弓矢取るも遅しと、また彼の所へ行くに、蛇は其の儘有り。やがて弓引き絞り放つに、過たずして然も当たり所よくして、さらに働きもせず有りければ、脇差を抜き、腹の脹れし所、堅さま三尺ばかり裂きてみるに、我が甥居たり。さて気づけ飲まして率て帰る。

後何の障りもなく息災になれり。彼の者に問へば、「飲まれしときは暗がり居るやうにて、何の苦もなし。其の後頭へ滴一二、三かかると覚えしか、熱うして遍身砕くるかと苦しかりし」と云ふ。それ故にこそ髪も生へず、すべりと（すべすべに）なりてあるらめ。げにこの人よ、初元結ひもそそけなく（そそけ）は髪が乱れること。髪が乱れることもなく）、小櫛の齒の恨みもなからん。なを法師にも手まさぐらるる毛垂れ（剃刀、特に婦人用の小型の剃刀）。

も、此の袖には捨てらるる有様、なれも先折れたる心地こそせめ。彼の天王寺山（ことわざ。天王寺山鉾の祭の日に、田舎者が薬缶と間違えて、奉行のキンカ頭（禿頭）にかぶりついた笑話（『浮世物語』二二五）があった。）は名にこそ負へれ、物に似ておかしきは此の頭にぞ侍る」。

*高田衛編・校注『江戸怪談集（中）』（岩波書店、一九八九年）による。

▼片仮名本『因果物語』（寛文元年（一六六一）刊）

中の十五「蝮い吞まれて蘇生する者の事」

江州にて、さる者、木を切りに行く。九つになる子、鎌を持ちて行く。此の子を蝮（うわばみの）吞みて、腹ふとく成りて行くを見て、父追ひ付け、鉋斧（まさかり）を蝮の胴体へ打ち込みければ、其の儘吐き出だしけり。其の砌（みぎり）は頭（かしら）の毛抜けたりと云へども、頓（やが）て本の如く生（お）ひたりと也。其の子廿七の時、受三（じゆさん）見て語る也。

濃州（じようしゆう）岩村（いわむら）にて、さる者、蝮に吞まれたり。小脇指（こわきびら）しにて、腹を切り破り出だしたり。此の男を、鈴木権兵衛（すずきごんべゐ）衛見（ゑみ）たりと語る也。

*高田衛編・校注『江戸怪談集（中）』（岩波書店、一九八九年）。